

3. 戦前期華文誌に書かれた徳島

荒武 達朗

はじめに

日清戦争の後、日本に対する中国の朝野の関心が高まるとともに訪日する人びとの数も増加した。これ以降 1930 年代後半の全面戦争勃発によって日中関係が破綻するに至るまで、人の往来という観点に立てば両国の間では緊密な交流が維持されていたといえる¹。例えば 1920 年代中国でのナショナリズムの勃興と日本の大陸進出の加速により緊張の度合いが高まっていた。しかしこの時期には公務・商務・就労・修学での渡航のみならず日本観光を楽しむ風潮も現れていたのである²。

このような訪日中国人の中には日本へ赴く動機や当地での経験・感想などを書き記す者がいた。これらの資料は彼らそれぞれの目を通した主観的な記録という性格は否めないが、人びとの対日意識の実像、日本と中国の関係、日本社会の様相、外国人の旅行の実態などを読み解く上で様々な情報を提供してくれる。

ただし彼らの足跡は日本全国に及んでいるわけではなく、訪問先には地域的な偏差が大きい。東京や大阪などの大都市や留学先の学校がある都市、さらには景勝地に関わる文章が数多く著されている一方で、幹線から外れた辺鄙な地方となればその数は極端に少なくなる。本報告書が主対象とする戦前期の四国徳島に関しては中国文で記された文章自体がほとんど存在せず、従来研究者の間で言及されることはなかったようである³。そこで小文ではこの数少ない事例において徳島がどのように扱われているかを紹介することを目的とする。まず日本側が発行した華文誌に取り上げられ主に中国人読者に伝えられた徳島の姿、続いて中国人観察者による当地の描写に考察を加えたい。

小文で利用したものは民国期の雑誌であるが、これらについては一部はオンラインデータベース『大成老旧期刊全文数拠庫』に依拠した⁴。

中国人読者に見せた“四国徳島”

最初に日本側の機関が刊行していた雑誌を検討する。戦前期の日本の幾つかの機関は宣

¹ 所謂、傀儡政権と満洲国との人的交流を除く。

² 易星星「『旅行雑誌』と都市文化：1927-1937 年を中心に」『中国研究月報』74 巻 6 号、2020 年参照。

³ 時代は遡るが那波利貞「支那書籍に見えたる阿波」『阿波郷土誌』（阿波郷土史研究会）第 1 輯、1930 年は主として明代の漢籍に記される徳島の記述を紹介している。

⁴ 国会図書館などでアクセス可能。ただし下に引用する『大陸画刊』『華文毎日』はこのデータベースには含まれていない。

撫活動の一環として、あるいは単に中国人の日本に対する理解を深めることを目的として中国語の雑誌を刊行していた。これらの雑誌には対象となる中国人読者に「見せたい日本」「伝えたい日本」の姿が投影されている。以下、ここに徳島がどのように表現されているのかを提示する。

①「電影 阿波舞踊」『大陸画刊』第2巻第6号、1941年

『大陸画刊』は1940年11月に上海の大陸新報社より創刊された。同誌は支那派遣軍の依頼と支援を受け、報道写真をもって占領地の中国人を宣撫する目的で刊行されたグラビア誌である⁵。文章主体の記事と言うよりは写真に対して簡単なキャプションをつけるという性格の雑誌であった。第2巻第6号に掲載された「電影 阿波舞踊」（日本語の意味は“映画 阿波踊り”）という記事は、1941年に公開された映画「阿波の踊子」の紹介である。出演する入江たか子と高峰秀子の写真を配し、次のような解説を附している。

阿波舞踊（邦訳：“阿波踊り”）

貿易商十郎兵衛は、悪代官に海賊の汚名を着せられ罪を得た。毎年阿波踊りの祭日の前になると、きまって「十郎兵衛が近いうちに現れる」という貼り紙が代官所の前に示された。生来の強欲である代官はよこしまな心を抱き、豪農の娘、お市を妾に入れ快樂を得んとした。豪農の父娘は致し方なく承諾し、興入れの日が近づいてきた。その日は恰も「阿波踊り」の祭りの日にあたり、通りは美しい娘たちであふれ、お市の駕籠が踊り狂う人びとを通り抜け代官の屋敷に入ったその時、たちまち踊子の衣装を着た浪人がそれに続いて中に押し入り、代官を斬ってお市を救い出したのだった。……。これはその人ではなく、まさに十郎兵衛の弟なのだった。

なぜこの映画が宣撫雑誌の記事に選ばれたのかは分からない。原題の「阿波の踊子」を象徴的な「阿波舞踊（阿波踊り）」と翻訳したのは、中国人読者にとってこちらの方がまだ内容を類推しやすいためか。彼らがこれに対してどのような感想を抱いたかは推し量りようもないが、当該誌が幅広く通俗的なものも取り上げて日本文化を伝えようとしていたことが看取される。

②和木邦「日本舞踊」『東光』第2巻第1期、1942年

③小寺融吉著・再邕訳「日本的舞踏」『華文毎日』第10巻第8期、1943年

『東光』は鉄道省国際観光局から1942年に創刊された。その発刊の辞によれば、興亜の大業を完成させるべく日中両国の相互理解を深め協力関係を強固なものとする大義の下、

⁵ 山本武利「解説」（『復刻版 大陸画刊』別冊1、文生書院、2018年所収）。

日本文化を中国の人びとへと紹介することを目指していたという⁶。『華文毎日』は1938年に大阪毎日新聞社によって創刊された。同誌については岡田英樹氏による詳細な紹介がある。雑誌創刊の主旨は「日本全体の真相をば、中国民衆に伝えるとともに、中国文化の真価を宣揚し、両国万世平和の基礎を固め、東亜不朽の建設を完成させるをもって唯一の使命」とすることであった。日本の国策を中国の人びとに宣伝し、戦争遂行に文化面から寄与していこうとする意図は明らかであったという⁷。これら2つの雑誌にはそれぞれ和木邦「日本舞踊」と小寺融吉著・再邕訳「日本的舞踏」という類似した内容の論考が掲載されている。両編はともに日本の伝統舞踊の形式と文化の特質を論じている。和木邦論文には「明治神宮舞踏」「能楽」「御神楽」「岐阜市之郷土舞踊『神代舞』」などと題する写真、後者の『華文毎日』誌の小寺融吉論文には「宝塚少女歌舞团的現代舞」「春天的田植舞」「香川県の盂蘭盆舞大会」という写真が文中に配されている。その一つとして、前者は「阿波之盆踊」、後者は「徳島県の煙草舞」という題名の写真を載せた。しかしこの“阿波の盆踊り”“徳島県のたばこ踊り”⁸についての説明並びに徳島に関する言及はなく、舞踊の一例として写真を提示しているだけであった。

以上①②③が日本側の発行する中国語雑誌に掲載された四国徳島である。事例は少ないものの、すべてに共通して「阿波踊り」あるいはそれと同系統の民衆の群舞がコンテンツとして使われているのが興味深い。現在のみならず戦前においても“徳島と言えば阿波踊りに代表される民衆の群舞”というイメージが背景にあるのではないかと推察できる。

中国から見た“四国徳島”のイメージ

では中国の人びとが刊行する雑誌に徳島はどのように描かれているのか。タイトルに「阿波」もしくは「徳島」を含む文章の中で、ある程度の分量を有するものは以下の1点だけであった。

④新民「徳島の姑娘」『人言周刊』第1巻第42期、1934年、pp.869-870

標題に記される「徳島の姑娘」とは“徳島の娘さん”の意である。紙幅はページ数にして僅か2枚、文字数は中国文で1600字余りに過ぎない。その内容は後述するが名所旧跡や県勢を紹介するものではなく、随筆の体裁をとった一種の評論である。

まず本文が掲載された『人言周刊』について解説しておきたい。本誌は1934年2月に創刊し1936年6月に終刊を迎えた。「徳島の姑娘」もこの創刊の年の第1巻42期に掲載され

⁶ 「発刊之辞」『東光』1942年第1巻第1期より。

⁷ 岡田英樹「中国語による大東亜文化共栄圏：雑誌『華文大阪毎日』・『文友』の世界」（同『続文学にみる「満洲国」の位相』研文出版、2013年所収）。ただし岡田氏によれば同誌には長期化する戦争の中、相互に孤立する満洲国・華北・華中といった地域をつなぎ、文芸交流の場を提供したという意義も看過できないとする。

⁸ この「煙草舞」とは阿波池田の「たばこ踊り」のことであろう。

ている。1934 年は中国で数多くの刊行物が出版された年であった。必然的に各誌は自らのオリジナリティを打ち出す必要があり、本誌は当時の社会情勢さらに普通の社会生活に関心を寄せ社会評論を重視するという方向性を示した。具体的には短評、専著、国外通説、国内通説、各地風光、望遠鏡と顕微鏡、芸文閑話、日記と筆記、雑著、読者の手紙というようなコーナーが設けられていた。魯春梅・王麗平氏によれば 1934 年の各号は中国で発生した大干魃、蒋介石らの推進する新生活運動に言及する記事が多数掲載された。これに加え女性、とりわけ“娼妓”をめぐる問題を取り上げるのが当年の『人言周刊』の特徴であった⁹。当時の社会の衰退が生み出した中国婦人の悲惨な生活に対して大胆かつ比較的深刻な分析を行うという方針が立てられている。この点は次節で見るとおり、本文の内容と大きく関係している。

作者の新民氏は 1934 年（昭和 9 年、民国 23 年）の 10 月 13 日早朝に小松島港に上陸し、鉄道に乗り換え徳島市に向かった。彼が何日徳島に滞在したかは不明である。徳島県側の資料、例えば『徳島毎日新聞』などのメディアには彼の来徳を告げる記事は見出せなかった。本文は次のような書き出しで始まる。このくだりは戦前期の訪日中国人が四国に抱いていた印象を知り得る興味深いところである。

日本では、我々中国人は商人であれ学生であれ、往々にして九州と本州の 2 島に在住しているが、近年北海道方面では商業を営む者の函館に居る者も少なくなく、農業を学ぶ留学生については多くが北海道帝国大学にいる。唯一四国一島だけは（我々は普通、日本三島と称するが、その実日本本国はもともと四島、つまり本州、九州、四国島、北海道島である）、我が国の商人と留学生の足跡の及ぶものは少ない。

この部分は若干の説明が必要であろう。「日本三島と称する」とは、1870 年代に至るまでの中国における日本像を反映したものである。その頃までの中国の文人・官僚にとって日本に対する認識は、取るに足りない小国を超えるものではなかった。

漢籍に登場する阿波徳島に関する記事を略述した那波利貞「支那書籍に見えたる阿波」によれば、『両朝平攘録』『函書編』『蒼霞草』『武備志』『登壇必究』など明代に編纂された書籍に日本地理並びに徳島についての記述が見られる。しかしその地理的位置関係については同時代の日本人が中国の地理に詳しかったのに比すれば著しく不正確であったという¹⁰。清代に至っても地理的な知識は増加したわけではなく、1848 年に成立した徐繼畬『瀛寰志略』巻一は、陳倫炯『海国聞見記』（1730 年）の記載に基づき「日本はいにしえには倭奴と称し、その国は東海の中にあり、三つの大きな島が並んでいる」と記している¹¹。なおこの三つの島は対馬、長崎、薩摩を指している。すなわち正確には“島”ではなく、

⁹ 魯春梅・王麗平「民国二十三年的《人言》周刊」『安徽廣播電視大學學報』2005 年第 3 期、2005 年。

¹⁰ 前掲那波利貞、1930 年。

¹¹ 「日本古称倭奴、其国在東海中、平列三大島。北曰対馬島……。中曰長崎……。南曰薩峯馬……。」徐繼畬『瀛寰志略』巻一「東洋二国」。

江戸時代の対外的な“港口”の中の3つを挙げたものである。

おそらくこのような認識が変化するのが初代駐日公使（1877年着任）となった何如璋の著した『使東述略』である。ここに「日本の領域は東の海の独立した四つの島であり、北都よりこれを見れば机や耳輪のようである」とあり、日本が4つの島から構成されることが示された¹²。さらに1879年に日本へ赴いた王之春による『談瀛録』はより詳細な日本の地理を叙述している。同書巻三「疆域」には「四面は海に面し、その所轄の地は琉球を除けば四島に分かれる」とある。この後4つの島について説明が加えられるが、四国については「一つは南部の阿波国であり神戸と対峙し間に内海を挟んでいる」と記されている¹³。阿波徳島が四国の代表として扱われているのは居留地のある神戸に近接していること、明治期日本では徳島は日本の中でも有数の大都市であったことによるだろう。これらの記述の変化に基づけば、1870、80年代より正確な日本の地理が中国の人びとにも伝わっていったと考えられるのである。

しかしながらこの頃から日本に対する認識が徐々に深まったとはいえ、その後もなお中国人の印象では“四国”の存在感は薄かった。この「徳島の姑娘（徳島の娘さん）」の作者が記しているように、“日本三島”というフレーズは、20世紀に至ってもまだ健在であったようだ。四国に対する認識はそれほど深化したとは言えないのである。

以下、次節で「徳島の姑娘（徳島の娘さん）」に何が書かれているかを検討する。

『人言周刊』誌に紹介された徳島：日本の女工問題

近現代における中国人の四国に対する認識はそれほど深いものではない。多くの中国人にとって当地はなかなか足の向かない土地であったが、作者の「四国へ行きたいと渴望する願いは思いがけず（1934年）10月12日に実現した」のである。その訪問の目的はここでは明示されていない。彼の徳島に対する当初の印象は次の通りである。

徳島市は四国唯一の大都市であり、以前友人の語ったところに依れば、徳島の女の子は四国一きれいで美しく、日本全国においても相当のランキングにあるということだ。

徳島が四国一の“美人の産地”という言説は当時必ずしも一般的であったわけではなからう。憶測を加えれば、作者は些かの好事家的な興味をもって当地を訪問したようにも見える。ただこれは読者の目を引くための“つかみ”であり、彼の目的は読み進める中で次第に明らかとなる。

小松島港を経て徳島市に到着した作者は、そこで目にした女性たちの装いや振る舞いに

¹² 「日本界処東瀛孤懸四島、自北都視之猶几案耳輪。」何如璋『使東述略』。なお何如璋は赴任に際し瀬戸内航路を通っており、四国について若干の記述を残している。

¹³ 「四面瀕海、所轄之地、除琉球不計外、統分四島。……一為南部之阿波国、与神戸対峙、中隔内洋。」王之春『談瀛録』巻三「疆域」。

ついて次のように記している。

街では全くもって神戸大阪や東京のようなモダンガールは目にすることができず、彼女らはみんな質朴な和服を着ている。普通の女学生について見れば確かに一種の村娘の美しさに満ちており、プチブル的雰囲気を選びながらも並びに封建的な羞じらいの思想を具えている。つまり彼女らはただ若旦那の妻となるか、旦那衆の夫人となるしかないのだ。

作者は本州の大都市の“モダンガール（摩登女子）”とは違う女性たちを発見した。当地の女性は質朴な「村娘の美しさ」を具えつつも、同時に封建制の桎梏に捕らわれているようであった。些か偏見を交えた女性像ではあるが、ただ彼自身もまたこれが「馬上より花を愛するような目で徳島を見ている」という表層的な見方であることを認め、その実際を見てみたいと考えるのであった。

では私は妓楼へ徳島の女の子を訪ねてみようか？ 残念ながら私は童貞の身であり、人に虐げられ氣息奄々とした女の子に貞操を破る気はない。同時に脳髓を振り絞って得たお金を思うがままに彼女らの凶悪な主人、とりわけ日本の搾取階級に渡す気もない。たとえその場に行ったとしても、彼女らの本当の苦しみの実態を知ることにはできずと予想できるし、万に一つ一人や二人の苦しみの実態を知ったところで、それが徳島の一部の人々の本音を代弁できるかどうかは疑問であるので、私は工場に行くことにした。

“妓楼”で働かされる娼妓に否定的な評価を与えている点は、本文を掲載する『人言周刊』のジェンダー問題に関心を寄せる立場に近い⁴。そこで作者は徳島の女性の実態について考察を深めるために、“妓楼”ではなく工場を訪問し女工たちの労働状況を参観することとしたのである。

彼はまず市役所に行って訪問先の工場について相談に乗ってもらったこととした。

市役所とは我が国の市行政機関の意味であり、要するに市政府である。市役所の産業課長であるC氏は⁵、彼の父親がかつて中国への輸出貿易に携わり我が国民の膏血より金儲けをしたことがあったのだが、思いがけず十分親切な案内をしてくれた。……。現在は彼の父親の経営するC繊維工場を英米の特色をもって大幅に改革し、経営は日々うまくいっているということだ。

⁴ 前掲魯春梅・王麗平、2005年。

⁵ Cは姓である。原文では姓を記しているがここではイニシャルで表記した。

応対してくれたのが“産業課長のC氏”である。現存するもっとも近い時期の職員録をひもとくと¹⁶、徳島市の産業課課長主事にCという姓の人物がおり、市内Z町に居住していることが分かる。『大徳島市街地図』（徳島毎日新聞社、1937年）によれば同町近辺にその姓を冠した「C工場」という名称の工場があった。加えて『別冊 徳島県歴史人物鑑』など複数の人物伝に掲載される氏ならびにその義父の伝に基づくと、上掲の文中に現れる“C繊維工場”はC氏の義父が創設した“C染織工場”であると推測できる¹⁷。同工場を営む会社の社史によれば1916年（大正5年）3月に阿波染織同業組合がC氏の義父に中国・朝鮮へ派遣して海外販路の拡大の為市場視察を委嘱したとある。社史にはその調査旅行の報告書が附されており、上に引用した「彼の父親がかつて中国への輸出貿易に携わり我が国民の膏血より金儲けをしたことがあった」という記述とも一致している¹⁸。以上のことからこのC染織工場が本文の作者、新民氏の訪問した工場と考えて間違いないだろう。

彼はC染織工場の購買部、作業場を視察しそこで働く女工の生活や労働の環境を子細に観察した。その彼女たちの境遇については一人の中国人観察者の目に映ったものとして興味深い。ただし小文の目的は徳島の女工の考察にはなくその一々を検討するには及ばないので、後掲の資料全文を参照されたい。ここでは作者の視点が象徴的に表れている部分を指摘するにとどめる。

彼は購買部が労働者の福利厚生をはかるものではなく経営者による“搾取”の一環であろうと観察し、ここで働く店員について次のように述べた。

……店で雇われている者は豊満で顔色がよい2人の少女であるが、この2人の少女は工場のオーナーの姪っ子であった。彼女らは工場で仕事をしている間、ずっと小説を読んでいるか意中の人のことを考えていた。

一方、徳島の郷村より集められてきた年若い女工たちの姿は次のように描写される。

しかし工場に一歩足を踏み入れると発育不十分な女工がみな忙しそうに作業をしており、その顔色は悪く痩せていて、全く病人のようであった！ 私は彼女らの仕事の苦勞をねぎらおうとしたが、彼女らはとても慌ただしく「旦那！ 私たちは一日夜までこんな感じで忙しく、あなたにちょっとした話もする暇がないんです」と答えた。

ここには2種類の異なる女性像が対置されている。一つは工場の購買部で悠然と働く経営者親族の娘のふくよかな姿、そしてもう一つは作業場で一日中忙しく労働に勤しむ痩せた顔色の悪い女工たちの情景である。この二者の対比を通して搾取する者と搾取される者の差

¹⁶ 徳島市『徳島市職員録』（昭和十四年九月一日現在）、徳島市、1939年。県立図書館蔵。

¹⁷ 徳島新聞社『別冊 徳島県歴史人物鑑』徳島新聞社、1994年。及び徳島の百人編集委員会『徳島の百人』徳島の百人刊行会、1968年。

¹⁸ 『C商事二十年史』C商事株式会社、1962年。

異を際立たせようとしていることは明らかである。1920年代から30年代にかけての中国における社会主義的思潮に沿った言論の一つとして位置づけられるだろう。

以前彼女らは日光と空気に満ちた徳島の村に住んでいたのに、今では埃や煙が顔にまみれる都会へと移ってきた。以前彼女らは身も心も楽しい徳島の田野で働いていたが、今では人を苦悩させる徳島の工場で働くようになった。徳島は以前は生産の場であり、現在もなお生産の場である。しかし以前は手工業であったが現在は機械工業となった。

同時に都市（工場）と農村（田野）という対立の軸を設定していることも本文の特徴として指摘できる。冒頭で作者は大都市の摩登ガールに見られない徳島の女性たちの「村娘の美しさ」に気付いた。このくだりはそれを敷衍して農村での幸福な暮らしが都市の工場での労働によって失われたことを慨嘆するのである。これもまた農村の復興を提唱する『人言周刊』の性格と関連していると言える。

もはやこれは四国徳島に限った話ではあるまい。さらに上の引用文の後を作者は次のように続ける。

以前美人で有名であった徳島は今でも「徳島は美人の産地である」と言われている。しかし以前の徳島の美人はどんな階級の家にも見つけることができたが、今ではお金のある人の家にしか見られない。だから私は徳島の娘さんに対しては十二分に残念な気持ちを抱いている。私は日本全国で美人を輩出しているところは、徳島と何も変わらないと確信している。

「徳島の姑娘（徳島の娘さん）」は徳島の紀行文であるかのように書き始められるが、最終的には「日本全国で美人を輩出しているところは、徳島と何も変わらない」ということ、日本各地の女性の労働環境もまた劣悪であろうという結論へと至る。本文の言わんとするところは基本的には作者の新民氏の政治姿勢によるものだが¹⁹、相当の紙幅を割いて工場で働く女工の待遇を叙述するのも『人言周刊』の編集方針、すなわち社会評論を重視し、女性など虐げられた立場の人びとに焦点を合わせる方向性に忠実であるが故と考えられる。本文の目的は“徳島の娘さん”を一例とした労働者に対する搾取、農村経済の没落、そしてジェンダー問題の議論にあったのである。

おわりに：徳島の娘さん“阿波女”のイメージ

華文誌に掲載された徳島に関する記事は極めて少ない。また現在のところ筆者が目にしたことのできた僅か1つの例である「徳島の姑娘」もまたほとんど徳島のイメージを伝えて

¹⁹ 『人言周刊』誌には新民という筆名で、日本の左翼運動を紹介する記事が掲載されている。

はくれない。冒頭の「美人の産地徳島」という言説もまた、あるいは作者の創作なのかもしれないし、そもそも本文の目的は徳島の紹介などではなかったのである。もし小文に微細なりとも価値を見出そうとするならば、戦前期の華文誌に徳島はほとんど記されなかった、ということが再確認できた点にある。

なおこの旅行記は次のように締め括られている。

……徳島の特徴として、徳島人は貯蓄好きで、徳島の娘さんも無駄遣いを好まず、彼女らは勤勉に絶えず働き、「家庭の財産」を増やしている。この点からすると、上海の女の子とは正反対のようで、東京の技術者も徳島の娘さんと結婚して徳島に住んでいるのも不思議ではない。

これもまた与太話ではあるが、“徳島県人の貯蓄好き”とはしばしば巷間で耳にすることができる²⁰。また徳島女性の節儉・勤勉は現在でも人口に膾炙する“讃岐男に阿波女”の俚諺を彷彿とさせる。香川の男性が徳島の女性を伴侶にすることが幸せか否かということは検証せぬ方がよかろう。ここで指摘できることは、1930年代の徳島で誰かが訪問中国人を応対する中でこのことを話したという事実である。徳島県人が県外の人にアピールする本県のイメージは、約90年という時を隔てても、現在のそれと共通するところが多々ある。そしてこれを聞いた作者もまた、おそらくはこれを「おもしろい」と感じ書き留めたに違いないのである。

²⁰ 貯蓄額の多寡では東京が全国都道府県の中で1位だが、年収に対する貯蓄額の割合で見ると徳島が1位となる。総務省「家計調査（貯蓄・負債編、2020年4～6月期）」

「徳島の姑娘（日本通信）」新民寄自徳島 徳島の娘さん（日本通信） 新民徳島より発信
『人言周刊』第1巻第42期、1942年

在日本，我們中国人，無論行商留学，往往在九州本州兩島，但是近年来，北海島方面，行商者在函館的也不少，就是習農的留学生，很多在北海道帝国大学的。惟独在四国一島，（我們普通称日本三島，其实日本本国，原来為四島：本州，九州，四国島，北海道島）我国商人和留学生的蹤跡，很少到達，我渴望到四国的志願，居然在十月十二日實現，雖然在三等船艙中，受到不少的苦痛，精神却依旧是十分愉快。

日本では、我々中国人は商人であれ学生であれ、往々にして九州と本州の 2 島に在住しているが、近年北海道方面では商業を営む者の函館に居る者も少なくなり、農業を学ぶ留学生については多くが北海道帝国大学にいる。唯一四国一島だけは（我々は普通、日本三島と称するが、その実日本本国はもともと四島、つまり本州、九州、四国島、北海道島である）、我が国の商人と留学生の足跡の及ぶものは少ない。私の四国へ行きたいと渴望する願いは、思いがけず 10 月 12 日に実現した。3 等船室では少なからぬ苦痛を受けたが、心は相変わらず十分愉快であった。

在十三日的黎明，到達四国上陸地小松島，乘了小火車達徳島市，徳島市是四国唯一的大都市，拋從前朋友説起，徳島の姑娘，在四国，是最漂亮而美麗，就是在全日本，也有相当的地位。我到了徳島，對於這一点，還印在我的腦海裏，不過在街道上，簡直看不到像神戸大阪和東京般的摩登女子，她們都是穿着很樸厚的日本和服，從一般女学生看来，的確滿露一種村女之美，而帶着小資產階級的氣味，並且有那封建怕羞的思想；她們只配做公子們的妻子，也只配做老爺輩的小姐。如果我們把這些景象去認識徳島の少女，那不過看到徳島的外表，同時也可以説是用走馬看花般的眼光去看徳島。

13 日の明け方、四国の上陸地である小松島に到着し、軽便鉄道に乗って徳島市にやってきた。徳島市は四国唯一の大都市であり、以前友人の語ったところに依れば、徳島の女の子は四国一きれいで美しく、日本全国においても相当のランキングにあるということだ。徳島に到着したとき、この点についてはまだ私の脳裏に刻まれていたが、しかし街では全くもって神戸大阪や東京のようなモダンガールは目にすることができず、彼女らはみんな質朴な和服を着ている。普通の女学生について見れば確かに一種の村娘の美しさに満ちており、プチブル的雰囲気を持ちながらも並びに封建的な羞じらいの思想を具えている。つまり彼女らはただ若旦那の妻となるか、旦那衆の夫人となるしかないのだ。もし私たちがこのような情景で徳島の少女を認識するのであれば、それは徳島の外見だけを見ているに過ぎず、同時にまた馬上より花を愛でるような目で徳島を見ている

と言えるだろう。

那末我到青樓去訪問德島少女麼？可惜我童男之身，不願把處男膜破於被人摧殘得奄奄一息的少女；同時決不肯把腦汁換來的孔方兄，隨意送給她們兇惡的主人，尤其是日本的榨取階級。即使到了那邊，料想決不能探得她們真正的苦痛情形，万一探到了一兩人的真正苦痛情形，是否能代表德島一部分人的真情，尚屬疑問，所以就向工廠走去，我先到德島市役所，市役所者：就是我国市行政機關的意思，簡言之，就是市政府。市役所の産業課長C君（原文にある姓をアルファベットで置き換えた），因為他的父親，曾經做過對華出口貿易，賺到過我国国民的脂膏，倒也十分親切的指導，一方面替他自己大事介紹，什麼到過美国，把美国的工廠管理法，完全學到；什麼到過英国，把英国的工場統治秘訣都探得，現在把他父親所經營的C（原文にある姓をアルファベットで置き換えた）織物工廠，用英美的特長，大事改革，營業日有起色。其實那工廠的發達，還是靠着工程師的努力；不過剝削工人的情形，却和德島其他工廠，完全沒有兩樣。

では私は妓樓へ德島の女の子を訪ねてみようか？ 残念ながら私は童貞の身であり、人に虐げられ氣息奄々とした女の子に貞操を破る気はない。同時に脳髓を振り絞って得たお金を思うがままに彼女らの凶悪な主人、とりわけ日本の榨取階級に渡す気もない。たとえその場に行ったとしても、彼女らの本当の苦しみの実態を知ることではできないと予想できるし、万に一つ一人や二人の苦しみの実態を知ったところで、それが德島の一部の人々の本音を代弁できるかどうかは疑問であるので、私は工場に行くことにした。私はまず德島市役所へいった。市役所とは我が国の市行政機関の意味であり、要するに市政府である。市役所の産業課長であるC氏は、彼の父親がかつて中国への輸出貿易に携わり我が国民の膏血より金儲けをしたことがあったのだが、思いがけず十分親切な案内をしてくれた。一方では彼自身の重要事を紹介してくれた。アメリカに行つてアメリカの工場管理方法を完全にマスターしたことやら、イギリスに行つてイギリスの工場管理の秘訣を探り出したことやら、現在は彼の父親の経営するC繊維工場を英米の特色をもって大幅に改革し、経営は日々うまくいっているということだ。実際その工場の発展は、やはり技術者の努力によるものだが、労働者の榨取の情景は德島の他の工場と何ら変わりがなかった。

我在進C織物工廠的時候，看到消費合作社般的小商店，在小商店裏，是出賣着工人日常應用的東西，可是有不少好像牛奶糖般的糖食，還有脂粉類的裝飾品，仔細考查，一切商品的價格，完全和工廠外商店的售價一樣；譬如像花王肥皂，在外邊出賣日金十錢，工廠裏也是這樣，可見工廠廠主，還是要賺錢。至少房租和親友的薪金，從假消費合作社裏騙到了，因為店裏僱用者面貌豐肥，氣色飽滿的兩位少女，這兩位少女，是廠主的姪女和甥女，她們在工廠工作時間，總是閒着看小說，或是在想意中人。

私がC繊維工場に入ると、生活協同組合のような小さな店を目にした。小商店の中では労働者が日常的に使うものを売っていたが、少なからぬキャラメルのようなお菓子もあり、さらに白粉の類いの装飾品もあった。子細に観察すれば全ての商品の価格は完全に工場の外の商店の売価と同じであった。例えば花王石鹼は外では10銭で売られていたが、工場内でも同様であり、工場主がやはり金儲けをしようとしていることが分かる。少なくとも部屋代や仲間の給料は偽生活協同組合でだまし取られていた。なぜならば店で雇われている者は豊満で顔色がよい2人の少女であるが、この2人の少女は工場のオーナーの姪っ子であった。彼女らは工場で仕事をしている間、ずっと小説を読んでいるか意中の人のことを考えていた。

可是一走進工場的的第一步，那發育還沒有完全的女工，都手忙脚亂的幹着工作，面色的黃瘦，簡直完全和病人相同！我就去慰問她們工作的辛勞，但她們很着急的回答說：『先生！我們一天到晚這樣忙，實在沒有空暇告訴你一些話』，那領我參觀的技師說：『這幾位姑娘，雖然年幼，但工作的效能，却比較其他年齡較大者好。』她們為的是賞錢，簡直是不要命了！

しかし工場に一步足を踏み入れると發育不十分な女工がみな忙しそうに作業をしており、その顔色は悪く瘦せていて、全く病人のようであった！私は彼女らの仕事の苦勞をねぎらおうとしたが、彼女らはとても慌ただしく「旦那！私たちは一日夜までこんな感じで忙しく、あなたにちょっとした話もする暇がないんです」と答えた。私をつれて案内してくれた技術者は「この子たちは若いけれど、仕事の効率はその他の年長者よりも良いんですよ」と言った。彼女らが働くのはお金をもらうためであり、まったくもって必死だったのだ！

她們十足的十小時工作，每天的工資，不過八十錢，扣掉飯資和雜費，只剩六十錢。但是廠主為增進她們的工作效率起見，備着很簡陋的寄宿舍，每牀可睡兩人的制度，在這裏竟至每牀可睡六人了，因為那工廠裏的寄宿舍，每間有三層席的緣故。

彼女らはまるまる10時間働いても、毎日の給料は80銭に過ぎず、食事代や雑費を差し引くと60銭しか残らない。しかし工場主は、彼女たちの仕事の効率を上げる見地に立って非常に簡素な寄宿舍を設けていた。それぞれのベッドは2人が寝られる作りであったが、ここでは1つのベッドに6人が寝られるようになっていた。なぜならその工場内の寮の部屋はそれぞれが3段重ねになっていたからである。

從前她們都住在日光空氣充足的德島鄉村，現在却住到煙塵撲面的市裏來了；從前她們

都工作於心神愉快的德島田野，現在却工作於令人煩惱的德島工場了，德島從前是生產的地方，現在依旧是生產的地方；不過從前是手工業，現在却是機器工業了。從前以美人著名的德島，現在仍舊說德島是美人的產地。但是從前德島的美人，在什麼階級的人家都可找到，現在却只能在有錢的人家看到，所以我對於德島的姑娘却抱着十二分的遺憾！我相信其他日本產美人的地方，和德島也沒有什麼兩樣罷！

以前彼女らは日光と空気に満ちた德島の村に住んでいたのに、今では埃や煙が顔にまみれる都会へと移ってきた。以前彼女らは身も心も楽しい德島の田野で働いていたが、今では人を苦惱させる德島の工場で働くようになった。德島は以前は生産の場であり、現在もなお生産の場である。しかし以前は手工業であったが現在は機械工業となった。以前美人で有名であった德島は今でも「德島は美人の産地である」と言われている。しかし以前の德島の美人はどんな階級の家にも見つけることができたが、今ではお金のあつた人の家にしか見られない。だから私は德島の娘さんに対しては十二分に残念な気持ちを抱いている。私は日本全国で美人を輩出しているところは、德島と何も変わらないと確信している。

不過德島有一個特性，就是德島人民喜歡儲蓄，而德島的姑娘，也不喜歡浪費，她們精勤不斷地工作者，增進她們的『家庭富』。從這一点上看来，却和上海姑娘完全相反，這無怪遠在東京的工程師，也要娶着德島姑娘，在德島生活着。(十月十三日)

しかし、德島の特徴として、德島人は貯蓄好きで、德島の娘さんも無駄遣いを好まず、彼女らは勤勉に絶えず働き、「家庭の財産」を増やしている。この点からすると、上海の女の子とは正反対のようで、東京の技術者も德島の娘さんと結婚して德島に住んでいるのも不思議ではない。(10月13日)